

名古屋市立女短大 木野内清子

1. 現今の和服は被服材料の進歩と生活様式の変化に伴い、日常着の大方は、ひとえ長着によって占められている。そこで近世以降の代表的被服である小袖形式の衣服の中から主として江戸時代の単衣、帷子を取りあげ、その形態、構成を中心に当時の慣習を調査研究し、現代の衣服への流れを考察してみた。

2. 服飾に関する各文献、風俗版画、および博物館の展示物等を資料とした。

3. 夏衣裳の単衣（絹物）帷子（麻）は共に羽二重、絹、麻等の下重ねを用いるのを正式とした。衿は袷仕立でその裏衿には、白緋、浅葱、紫等の絹麻地が主として用いられた。又女物の袖口には袖口布が掛けられ、用布は衿裏と同様（本調査における実物数十点はすべて緋色であった）であり、更に男物および略服には袖口布を用いず、袖口端を折りぐけした例もみられ現今の仕立方への推移がうかがわれた。その他、衿下、裾等の扱いに特徴をみることが出来た。

元来、上流の下着であった小袖形式の衣服が時流によって表着となったごとく、単衣、帷子の仕立法、着装法等が簡略化されて現在のひとえ長着に至るその流れが認

の抵抗地。その他、色調、模様地も触机で報告する。